

討論について

加藤 正

今日ようやく本誌七月号石原氏の反批判を読む機会を得た。氏の言われる事は以前から判^{わか}っている事であつて今更それによつて再考するものは何もない。併^{しか}し討論は大分つぼにはまつて来た様だ。反対者が私に対して何を云わんと欲しているか、私には非常によく解る様に思うので問題を小さく限定して詳細に展開すれば必ずや相互了解に到達するものと確信している。併^{しか}しもはや単なる誌上討論に限定されていることは無駄が多くて望ましくない。一方では多少とも体系的な著述、他方では親しく一堂に会しての討論が是非必要だと思ふ。目下病中で近いうちにそれを果し得ない事は全く残念だが、石原氏の云うとおりの討論は『非常に有望な事態』（但し単に最近の科学論や芸術論の範囲をはるかに突破した原理的に有望な）を約束しているので、氣永にゆつくり進めて行き度いと思ふ。一体に私がこの討論を進めている意図、眼目、それからこの問題の意義又は影響範囲は理解されていない様に見える。さし当つて次のことを指示して置き度^たい。私の目ざして居る第一の点は、弁証法——『自然弁証法』で概念の本性的研究を前提するといわれ、「弁証法の問題に寄せて」では任意の提言から始めて環線の系列をなして発展する無限に増加する方面を有する認識と云われたその弁証法的内容的な展開（且^{かつ}つ亦それと社会的人類及びプロレタリアートとの相互関係の全体の闡^{せんめい}明）である。これまでの討論はその単なるはし書きに過ぎない。今春の拙稿では行きがかり上従来の視点から始めて問題に廻転を与えたのだが、その新視点から見られたならば問題がもう少しはつきりすると思ふ。そのうち筆を取ることが出来る様になつたらこの問題を全く別な視点から照明して『有望な事態

の招来』に資し度たいと思ったている。今は批判者に対する謝意のみにとどめます。

(八月三日代筆)

『唯物論研究』第五九号、一九三七年九月号)

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{mx}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。